

パンの實の木はニュー・ギニヤ及びニュー・カレドニヤには成育しないらしい。東部メラネシヤの諸島——殊にフィジイ島では、カバが盛んに栽培されてゐる。カバの根は例のカバ酒といふ強烈な酒の原料となるのである。そのほか一般に栽培されてゐるものとしてはサゴ椰子と檳椰子がある。サゴ椰子は殊にニュー・ギニヤに多く、同島の大部分の住民はその實からとつた所謂サゴを主食物としてゐる。檳椰子の實はマライ地方に於けると同様に石灰と混ぜて茹醬の葉に包み宛もチューイン・ガムのやうに嚼むのである。農業を営む島民は大抵副業に豚、犬、鶏等を飼養してゐる。豚や鶏は専門に飼養してゐる者もある。

またメラネシヤでは狩獵が比較的盛んである。殊にニュー・ギニヤの内地には、野豚やカンガルーが非常に多いので、土人は盛んにこれを捕獲して食用に供してゐる。彼等の間では弓矢が主要な獵器となつてゐるがある島——例へばニュー・ブリティンやニュー・アイルランドの住民は、まだこれを使用するほど進歩してゐない。ニュー・ギニヤでは弓矢のほかには投槍も盛んに用ひられてゐる。

四面海を以て圍まれた小島に住む民であるから、メラネシヤ人は一般に漁獵は巧みである。遠

洋に乗り出して大規模の漁獵をするやうなものはまだないが、ある島——例へばフィジイなどの住民は多數協同して相當大仕掛けな漁業を営んでゐる。普通に行はれる漁獵法は投槍魚<sup>マス</sup>または網を使用する方法であるが、それ以外に毒や鼠を用ひる方法も相當廣く行はれてゐるやうである。

メラネシヤの家

メラネシヤの家には三種類ある。一つは水上に建てられたもの、一つは普通の陸上に建てられたもの、他の一つは高い樹木の上に造られたものである。第一の水上に建てられた家屋は、主として海岸に多いが、オランダ領ニュー・ギニヤには内地の河川の上に建てられたものが非常に多く、一部落全部が河上にできてゐるやうなところが珍らしくない。かゝる家屋は無論餘り大きくない。そして、建築材料はすべて丸木と棕櫚其他の木の枝葉とに限られてゐて、極めて粗末な小屋に過ぎないが、比較的堅固でちよつとした暴風雨くらゐでは容易に壊れない。水上の家も陸上の普通の家屋も大體の構造は同一である。何れも屋根は非常な急勾配をなし、その兩端は、陸上の家屋ならば地面につかばかりに垂れ下つてゐる。中には地面からすぐ屋根になつてゐるものもある。つまり細い丸太で八形の骨組を直接地上に建て、それに棕櫚や芭蕉の葉で屋根を葺いただけのものもある。しかし、床は一

般に地面から五六尺ぐらゐ離れてゐる。そして、大きな家屋には、屋内の中央に棟を支へる太い柱が立ててある。

樹木上の家屋さいふのは、主として椰子の木の上に造られ、普通寢室に使はれる。野獸の害を避けるためである。これは何れの島にもあるが、矢張り最も多いのはニュー・ギニヤである。蓋し、野獸や野獸に等しい蠻族の最も多いのはニュー・ギニヤであるから、同島の住民にはその必要が多いのであらう。

メラネシヤ  
人の服装

メラネシヤの男は、すべて長い樹皮製の帯を腰から胸のあたりへ巻きつけてゐる。その長さは普通六尺乃至一丈であるが、中には五丈六丈さいふ長い



屋家大のヤシネラメ〔圖九十九第〕

ものもある。かゝる極端に長い帯はたゞ腰部に巻きつけるだけでなく、腰より上の方へも數回巻きあけて、その端を背後にさけて置く、普通はその帯以外には何物も身につけないが、中には同じく樹皮で造つた頭巾を被つてゐる者もある。

女は植物の纖維か草で造つた短い腰巻をしてゐる。それ以外のものを身に纏ふことは殆んどない。要するにメラネシヤ人の服装は、實に簡單で、いはゞ男女とも下帯一枚で暮してゐるやうなものである。尤も、フィジイ島民の用ひてゐるタバ即ち衣服はそれほど原始的なものではない。が、これはポリネシヤ文化の影響を受けた結果であつて、純粹のメラネシヤの服装ではない。

かく衣服は極めて簡單であるが、身體につける裝飾品は随分數多い。頸、胸、腕、手首、脚……ミ殆んど全身隈なくさまざまの裝飾品で飾り立てる。装身具は大抵龜甲か野猪の牙で造つたものである。身體にさまざまの模様を描く風習もある。また男女とも盛装の場合には頭髮にも皮膚にも植物から採つた油と黄土とを練り合せた一種特別の化粧料を塗りつける。なほ、オランダ領ニュー・ギニヤの住民の中には、上下の前歯全部に鏤をかけて圓錐形に尖らせてゐるものがあり、ニュー・アイルランドやニュー・ヘブライドの島民間には、幼時頭を固形物で壓迫してわ

ざく／＼トルコ帽のやうな形にしてしまふ奇風がある。

メラネシヤ  
の美術工藝

メラネシヤ人は  
ポリネシヤやオー  
ストラリヤの土人  
と異つて陶器を造

る術を知つてゐる。陶器と云つてもすべて素焼であるが、その簡粗な形、グロテスクな圖案は一種特別の味を持つてゐる。しかも陶器製造の道具としては、たゞ一箇の槌と一本のへらとがあるにすぎない。

彼等は陶器の製法を知つてゐるばかりでなく、彫刻にもなかく／＼優れた腕を持つてゐる。戦用の棍棒、船の龍頭、大きな木製の太鼓といったものに極めて精密な彫刻を施す外、屋内の柱や



具道の人ヤシネラメ [圖百第]  
ヤニドレカ・ーコニ

家具類にもいろ／＼のものゝ形や模様を刻みつける。

また樹皮や木の葉の繊維または柔かな草を利用して敷物や籠を編む。何れも特に立派なものは云ひ難いが、何處もなく捨て難い趣がある。陶器でも、彫刻でも、編細工でも、すべてメラネシヤの美術品、工藝品はその形態圖案が如何にも奇怪で面白い。なほ彼等の好んで用ひる色彩は赤、白及び黒の三色である。

ミクロネシヤ  
人

ミクロネシヤはマリアナ、パラウ、マルシャル、及びジーベルトエリスの諸群島にグワム、オーシャン、ナウル等の諸島、總計一千有餘の小島嶼からなる。何れも眞に猫額大の小島ばかりであるが、人口は比較的多い。

彼等の起原については、從來多くの専門家によつて、純粹の種族ではなくて、幾つかの異種族の混血種と認められて來た。或人類學者は彼等を以て、ポリネシヤ人ミメラネシヤ人との混血種であるを考へ、或學者はポリネシヤ人とマライ人との雜種と認めた。また、以上三種族全部の混血種であるを論斷してゐる人もある。

が、カロリン群島のボナベで發見された太古の遺物によつて、この諸島にはある時代に相當高

い文化を有する民族が住んでゐたものに違ひないを推定されてゐる。

ボナベで発見された太古の遺物といふのは、同島海岸の珊瑚礁の上に半ば壊れたまゝ遺つてゐる大規模な廢墟で、現今では水面の下に沈んでゐるが、其處には幾多の壯大な建築物が立ち並び周圍には運河または堀を思はれるものがめぐらされてゐる。

そして、宮殿らしいもの、寺院を推定するもの、王族の墳墓を思はれるもの等が特別に廣い敷地を占めてゐるが、建築物はすべて長方形で、その柱はみな五角形または六角形に限られ、廢墟全體の形は圓錐形をなしてゐる。世界の多くの専門家の意見は、多分一箇の城市であらうといふことに一致してゐるやうである。

なほ、これによく似た廢墟がマリアナ群島に於ても発見されてゐる。果して、何時頃の建造物であるかはまるで判らないのであるが、とにかくかういふものが確乎として残つてゐるのであるから、それが今日の太平洋諸島諸民族とは全く異つた文化を持つ民族が住んでゐた證據となるのである。

ミクロネ
シヤ人の
衣食住

ミクロネシヤには前述の通り一千有餘の島が散在してゐるが、それは何れも極めて小さなもので、耕地を作る場所のある島は、精々二三十しかない、それ以外の諸島は殆んどみな周圍一二里ぐらゐの小島か、然らずんば珊瑚礁に過ぎないのである。されば、住民の大多數は漁業を唯一の生業とし、海産物を椰子、パンの實の木、マンゴ、バナナといふやうなもの、果實を食料として生活してゐる。尤も、わが國の統治下にある約五萬のミクロネシヤ人は、近來穀物や種々の蔬菜類にもありついてゐるが、それでも汽船の碇泊する諸島から非常に遠隔の地にある小島の住民は、かゝる恩典に浴する機會は事實上餘り多くない。

何分小さな島が恐ろしく廣い海面に互つて散在してゐることであるから、風習は随分まち／＼である。

先づ服裝について見ても、マルシャル群島の住民は、大體に於て、男はズボンを着き、女はちよつと西洋婦人の寢衣のやうな形の寛闊な着物——色合は純白、桃色、淡青色等が多い——を着て、頭にはリボンや生花をつけてゐるが、カロリン群島へ行くに、男は腰に一筋の布を纏ふだけ、

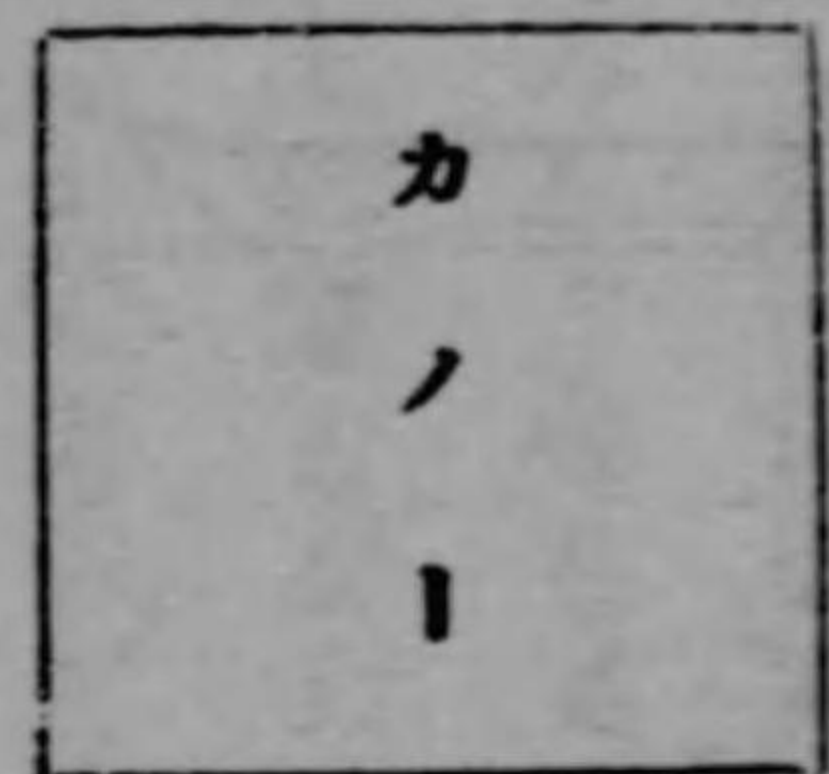
女は椰子の嫩葉その他の植物の葉でつくつた厚い腰蓑を一着に及ぶだけである。無論マルシャル群島民の服装は、古くから帆船なきの交通路になつてゐた關係上、ヨーロッパ人の影響を受けることが多かつたので、かく西洋くさいものになつたのであらうが、ミにかくカロリン群島民のそれとはまるで雲泥の相違である。

また小笠原島からいくらかも離れてゐないサイパン島のカナカ族などは、人相骨格はわれわれ日本人と非常によく似てゐて、色も餘り黒くないが、男は一年中フンドシ一つ、女は例のだぶくしの着物といふ服装で暮してゐる。トラック島の女は着物は着てゐるが、それは宛も風呂敷に頭ミ手の通るだけの孔を明けたやうなもので、袖もなければ、縫目もない。洗つて乾してあるのを見るミたゞ一枚の丸い布である。されば、ミクロネシアの服装は、何れが固有のものであるか、また代表的のものミ云ひ得るか、全く自分にはわからない。

服装ばかりでなく、住家の造り方もそれ／＼異つてゐる。先づマルシャル群島では、珊瑚礁の砂地に立てた椰子の葉葺の掘立小屋が普通で、屋内には「タコの木」の葉で編んだアンペラが敷いてある以外には何等の裝飾も施してない。服装に比較するミ住家は實に粗末なものである。

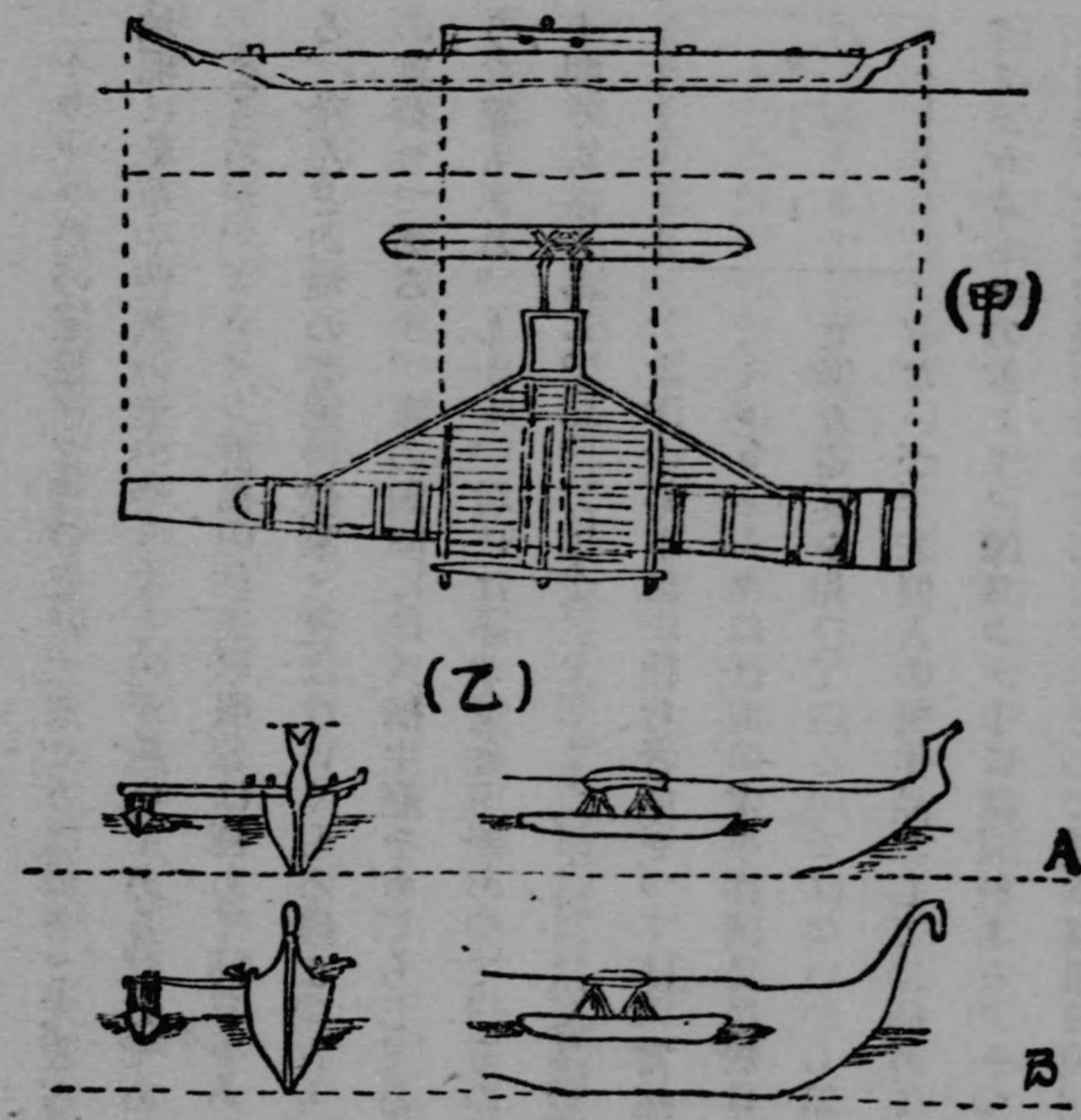
トラック島の家屋はなほひどい。造り方は前者ミ大差ないが、床のある家は殆んどなく、たゞ地面に乾草や芭蕉の葉のやうなものが敷いてあるだけである。

ミころが、カロリン群島の住民は服装は極めて簡單であるが、何れもみな立派な家に住んでゐる。殆んど内地の普通の農家ミ違はないくらい纏まつたものである。無論、木造で、屋根は椰子の葉葺きであるが、家の周囲には大抵生籬をめぐらしてゐる。ちよつミした庭園のついてゐるやうな家もある。しかも、村には必ず集會所があつて、その大きいのになら、幅六七間、長さ二十間くらゐもある。内部には大きな室があつて村民の會議所ミなれば娛樂場ミもなるのである。



大洋中の小島に住む者ミつては、當然船が唯一無二の交通機關である。そこでミクロネシアには他の太平洋諸島に於けるミ同様なか／＼いゝ船がある。無論立派な道具を用ひて造るのではないから船ミ云つてもそれは小やかなボートに過ぎないが、未開人の製作品ミしては極めて優秀なものである。

ミクロネシアのボート、即ちカノーには三種ある。一つはソアアップミ云つて通例長さ九メートル前後、吃水が浅くできてゐて、主として貨物運搬に使用され、他はチヨコピン及びボツボの二



舟の人ヤシネロクミ [圖一百第]

(甲) 荷物船  
「ツアアップ」  
(乙) A「ボッポ」  
B「チヨコピン」

種で、これは吃水が比較的深く長さは二メートルくらゐまでいろくあつて、遠洋航海、漁業及び珊瑚礁内の交通に用ひられる。何れも丸木を刳つたものであるから、船體は恐ろしく細長く

中央部からは片舷に長い腕木が突き出てるて、その先端に魚形水雷のやうな形の浮木が附いてる。船體の安定を保つためである。また、腕木ミ船體の中央部との上には竹で座席が作つてある。大形のは、丸木の刳つたのを底部ミして、その上に木を削つて繼ぎ合すが、釘は一切用ひない。すべて、椰子の實から採つた油ミムルグヤツ草の汁ミ椰子花の萼を焼いて、灰ミ煉り合せた一種の膠で繼ぎ合せたうへ、椰子の樹皮で製した極めて強い繩で固く縛つて置くのである。船體の材料は主としてパンの實の木で、造船道具ミしてはたゞ一挺の鉋ミ小刀ミ一種の鑿ミがあるだけであるから、大形の舟を作るには、どうしても五六年はかゝるさいふここである。航行には帆ミ權ミを用ひるが、帆は大抵椰子の葉か蘆を編んだもので、形は正三角形が普通である。宛もヨットの帆のやうに、船體の割合には非常に大きいので、順風の時には一時間十哩以上の速力がある。權は長さ三四尺のオール型のもので、主として玉名樹を以て造られる。これは兩手で持つて水を掻くやうに使ふのである。なか／＼その呼吸は難かしいが、ミクロネシャでは小さな子供でも巧みにこれを操つて島から島へ往來してゐる。

ボ リ ネ シ ヤ 人
----------------------------

ミクロネシアの東南方に位せる諸島即ち西南ニュー・ジラランド、東はイースター島北はハワイ群島へ至る一帯の海面に、宛ち石を撒いたやうに散在してゐる夥しい島々は、總括してポリネシヤニ稱し、それらの島々に住む土人を總稱してポリネシヤ人ニ云ふ。

ポリネシヤ人は大體に於て身長はわれ／＼日本人くらゐで、皮膚の色は褐色であるが、容貌は比較的調つてゐる。極めて敏活であり伶俐であつて、考察力も判断力も、メラネシヤ人やオーストラリヤ人よりは優れてゐる。

ポリネシヤ人の多くは矢張農業か漁獵を營んでゐる。一體ポリネシヤの島々は何れも峻峻な山地か、然らずば珊瑚礁島で、メラネシヤの諸島のやうには天産物が豊かでない。そこで彼等は自然の供給するところのものをでき得る限り利用せんとして不斷の努力をつゞけて來た。であるから、彼等は未開人ではあつたが、天産物の豊かな島に放縱な生活をしてゐるメラネシヤ人よりは遙かに高い文化を生み出した。耕地を見ても、ポリネシヤのそれは相當進歩したものである。即ち、それはメラネシヤの耕地のやうな粗雑なものではなく、ちやん／＼畑の形を備へ、必要な場

所には灌溉工事まで施してある。しかし山地が多い關係から、耕地は大抵所謂階段式になつてゐる。箇々の耕地の面積は餘り廣くない。

最も主要な作物は、例のタロ芋であるが、パンの實の木、ココ椰子、バナナ、ヤム芋、薩摩芋、砂糖黍、カバ及ウアミといふ一種の桑——その樹皮よりタバ(衣服)の原料たる纖維を採る——等も廣く栽培されてゐる。

ボ リ ネ シ ヤ の 家
---------------------------------

ポリネシヤの家屋は一般に低くて、細長い。屋根は棕櫚の葉か蘆で葺き、その形は宛もボートを逆さまにしたやうである。柱は無論非常に短いが、すべて石の土臺の上に立てられてゐる。殊にマルケサス島やソサイエティー島では、それが非常に大きくて、一種のプラット・フォームをなしてゐる。外廓——壁に當る部分も普通屋根と同一の材料、即ち棕櫚の葉や蘆で造られる。が、ニュー・ジラランドのマオリ族はこれに板を用ひ、西洋風の窓などを造つてなか／＼氣の利いた建築にしてゐる。家はすべて東向である。

屋内は幾つかに區劃されてゐる。が、それは壁から壁へ大きな一枚の蓆を引張るだけであるか

ら、何時でも必要があれば容易に移動させることができる。たゞ、最も奥まつた一室だけは例の  
 棕櫚の葉か蘆の壁で區劃されてゐて、常に家族の寢室となつてゐる。他の室には普通何等の裝飾  
 も施してないが、この寢室だけは周囲  
 の壁にすつかり別製の花蓆を張り、床  
 にも特に厚い蓆——大抵蘆か藎草で編  
 む——を敷き詰めて住み心地のいゝや  
 うになつてゐる。



【圖二百第】  
 (女のガント) 服衣の人ヤシネリボ

既に記した通り、主としてウアミいふ一種の桑の樹皮から造つた纖維で造られる。無論、絹布や

ポリネシヤ  
 人の服装

オーストラリヤの土  
 人やメラネシヤ人は殆  
 んど赤裸に近いが、ボ  
 リネシヤ人は殆んどみ

毛物のやうに立派なものではないが、丈夫なこまはちよつこ他にその比を見ないくらゐである。  
 衣服の形は各島によつて多少異つてゐるが、大體に於て男の衣服はシャツのやうな形の上衣と  
 サロンに似た腰布、女のそれは上下つゞきの長い寛闊なものである。尤も上衣の代りに蓆のやう  
 なものを羽織る者も尠くない。ニュー・ジラランドのマオリ族などは前記のやうな衣服を着けた  
 うへ男は蓆のやうなものをエプロン式に胸に當て、女はマントのやうな形の美しい上張りを纏う  
 てゐる。女の中には羽毛で造つたショールを用ひてゐる者もある。また既に記した通り、クック  
 ファイジイ、ハワイ等の土人——殊に上流社會に屬する男女には、全く固有の服装を廢して、純然  
 たる洋装をしてゐる者も尠くない。ズボンだけまたはスカートだけを用ひてゐる者ならば、下級  
 民の中にもざらにある。

奇抜な

刺青

刺青はポリネシヤ人に限らず太平洋諸島の住民は殆んどみなそれを行ふが、ボ  
 リネシヤ人には餘り他に比類のない實に奇抜な刺青を施してゐる者が多い。  
 サモアやマルケサスの島民には、彼等の神の使として尊敬する犬の姿を麗々し  
 く胸や腕に刺青してゐる者が非常に多い。鱗や蜥蜴のかたちを入墨してゐる者も



ある。また、アイタキ島には、先祖の乗つて来たカノの紋を交身してゐる者が少くない。最も奇抜なのはニュー・ジールランドのマオリ族で、この民族の男には、満面にあたかも唐草模様のやうな文身を施してゐるものがある。現今では餘ほ少なくなつたが、以前にはすべての男がかゝる猛烈な刺青を施したものださか。

そこで、イギリスがこの島を手に入れた当初には、その珍奇な首を買ひ取つて——さいふが果して買ひ取つたのか、或は無断で略奪したのか、それはよくわからない。が、さうも後者であつたのではあるまいか。自分には思はれる。幾ら當時のマオリ人が野蠻未開であつたからして、まさか首を賣るものはなかつたらうと思はれるからである。無論當時のマオリ族は食人種でもなければ、首狩民族でもなかつた。

しかも、當時のイギリス人は、タスマニヤの全島民を一人残らず虐殺してしまつたほどの猛者だつたのである。が、さかにかく彼等はその珍奇な首を手に入れて、盛んに本國の博物館へ送つたものである。

今日では針を用ひる普通の手術法が行はれてゐるが、以前には獸骨製の鑿のやうな道具で皮膚

に筋をつけて墨をさしたものである。何しろ容易ならぬ大手術であるから、手術を行ふ者はツツ



式禮の人リオマ【圖三百第】

ナー——またはトフナ(熟練者の意)——さよばれて、人々から尊敬され、過分の報酬を受けてゐる。

マオリ族の間では男ばかりでなく女も随分刺青をする。それは男の場合ほさ大袈裟なものではない。ただ額と唇の周圍にちよつと小形の模様をつけるだけである。

ついでにこの民族の奇習を一つ記して置く。この民族の間では、鼻を

鼻を付けて、ちよつと手を握り合はすのが最も鄭重な挨拶となつてゐるのである。鼻で押しつゝするものは随分振つた禮式ではないか。

ポリネシヤ  
人のト筈

吉凶禍福を豫知するこゝは何人も切望するこゝろである。されば何れの社會にもト占の術をいつたものが相當に發達してゐる。絶海の孤島に住むポリネシヤ人間にも吉凶をトふ方法は實に多い。

サモア島の住民は戦争の折、法螺の貝の色が白く見えれば勝利の徴、黒く見えれば敗北の兆、その音が澄めば勝、濁れば負としてゐる。また同島の或る地方では、石を高く積み上げてそれが東に倒るれば敗北、西に覆れば勝利の兆とする。またタヒチ島では、屋根に住むバタミといふ昆蟲が騒ぐのは戦が起るこゝいふ豫告であるこゝされてゐる。こゝろがクツク群島のある島では、紅雀、カワセミ等が飛來すれば戦が起るこゝ信ぜられてゐる。

以上は主として戦争に關するものであるが、疾病の場合には随分いろ／＼の吉兆凶兆がある。先づタヒチ島では自分の信仰する魚、鳥、長蟲の類が傍へ近づいて來るのは凶兆だとしてゐる。これと同様のこゝろがラトロンガ島でも信ぜられてゐるが、同島では殊に蟋蟀が身體にこまるこゝろを忌む。サモア島では、ヴァヴァ神の權化なる鱈があらはれ、ば病人は死ぬこゝいふ。トンガ島では水鶏や巢の泣く聲を凶兆だと云つて忌む。

罪のあるなしを神に判定して頂き、それによつて有罪無罪を決するこゝいふ、いはゞわが國で行はれた探湯のやうな方法がポリネシヤの諸島では現今でも行はれてゐる。左にその數例を擧げて見よう。

サモア島では何か事件が起るこゝ嫌疑者一同を氏神の境内へ連れて行つて、神物——椰子の堅殻で造つた水飲器、法螺貝、又は二箇の石を取り出し、一同の者をして順番に手をその上にかざさせる。そして、その時、神主ができるだけ重々しい聲で「神よ照覽あれ、眞の犯人ならば直ちに割れよ」こ祈る。

またかういふこゝをやる場合もある。それは主として盜難のあつた時であるが、酋長をはじめ事件の關係者一同（無論その中には嫌疑者も入る）が被害者の家に集つて、各自が結びの一つある短い緒をもち、タヴァといふ酒の中に入れてよくかきませ、最初にその少量を地面に注いで盗人を出したまへこ祈つた後、一同が一口づゝ飲みまわす。かくすれば犯人は必ずその緒を飲む、するこゝその緒には結び目があるから死ぬ、死なないうまでもひこい苦しみを受けるこゝいふのである。こゝろが、タヒチ島では、盜難があるこゝ神主が招きに應じて被害者の家へ行き、その土間に穴

を細つて水を満たし、「盗賊を出したまへ」と祈念する。感服しました場合には盗人の面影が水にうつるさいふのである。一回で成功しなければ翌日またくり返す。

ラトロンガ島では、神官でなく魔術者が依託を受けて被害者の家へ行き、夜に入るのを待つて土間へ穴を掘る。そして、その中で火を焚いて、手頃の石を一箇投げ込み、それが赤くなるまで魔術者は一生懸命呪文を唱へながら飛んだり跳ねたりし続ける。かくて、石が焼けて赤くなるまで魔術者は太い槍でそれを幾度もなく突く。かくすれば犯人は必ず恐ろしい災厄を受けて死ぬさいふのである。

太平洋諸島、殊にポリネシヤの習俗として見落すことのできないのは、所謂タブである。

一體タブは太平洋諸島のみに見る習俗ではなくて、東はアメリカ大陸の西海岸から西はアフリカのマダガスカルまで苟もインドネシヤンの移住した痕跡のある土地には殆んど例外なく行き互つてゐるのであるが、現にポリネシヤ語のタブがそのまゝその名稱として一般に通用してゐるくらゐであるから、タブの本場は矢張ポリネシヤであること云ひ得るであらう。

また事實上ポリネシヤの民俗には、この習俗が實に深く浸潤してゐる。如何なる孤島に行つても、必ず其處にはタブ即ち禁斷物が幾つかある。ある土地ではバナナがタブになつてゐる。またある土地では魚類がタブになつてゐる。或はまた一つの山全體がタブになつてゐるいふことで、到るところにタブがある。案内を知らない者がうっかりそれらのタブを宣せられたものに手をふれる、或はまたタブになつてゐることをやつたら大變である。こんな慘い目にははされるかわからない。ポリネシヤ人の間では、古來タブの侵犯は、追放または死罪に處せられることゝなつてゐるからである。

タブさいふ習俗は、本來は神の特有性でもいふべき清淨無垢を保持しようといふところから起つたことであること云はれてゐる。

神靈神物は清淨なものであるから、濫りにこれに觸れて穢してならない。又それと同時に神の供物なるものも清淨であらねばならぬ、それ故に後日神に捧げやうと思ふもの——例へば、この木は最も發育がいゝからこれに實つた果實は神に獻じようと思つた場合には、その果實は勿論

のこも、その木にもなるべく觸れないやうに、穢さないやうにしたい、また他人にも無暗に觸れて貰ひたくないといふところから、お互に神靈神物の清淨を穢さないやうにするこもに、各自が供物にしようを考へてゐるものを傷つけたり、取つたりしないやうに注意し合つた。それがタブの抑の起原だといふのである。

しかし、現在ではタブはもつと廣い範圍に應用されてゐる。即ち、神に屬する物または將來屬すべきもののみでなく、すべて他人に觸れられては困ると思ふものは何物でもこれをタブにしてしまふ。殊に神の意を推測し得るもの即ち神奇を稱せられて社稷の祭祀を任としてゐる王者や、その委囑を受けて専らそれを管掌してゐる神職は、自己の所有に屬しないもの——即ち他人の持物に對しても、ある程度まで自由にタブを宣ふことができるので、王者は盛んにこれを政治上に應用する。

一體ポリネシヤ諸島は大部分は險しい山地か、さもなくば珊瑚礁で、物資は餘り豊かでない。これが大陸ならば、たゞへその土地に充分な物資が生産しなくとも、いくらでも他の土壌から輸入できるから恐るゝには當らないが交通不便な絶海の孤島ではそんな自由は夢にも得られない。

一朝旱魃や暴風雨のために彼等の重要食料品たる野菜果物の類——バナナ、パンの木の實、マンゴ、パイナップル、椰子の實、ヤム芋等——が不作であつた場合には、當然その島民は飢ゑなければならぬ。それを免れるには、豊作の時に能ふる限り食料品を節約して貯藏して置くより外はないのであるが、極めて單純な頭の持主であるところの一般島民には、明日の計を考へるなどいふ能力はない。あるかもしれないが先づ絶對的にそんな面倒なこもを實行しやうとはしないから無能力と變らない。

そこで、その無智な民を飢ゑさせないやうに、絶えず明日のこと來年のことを考へるのは常に王者である。

そこで何れの島また何れの部落に於てもその長は絶えず農圃の状況を調査して、もし十分な收穫がないと見れば、配下の勞働に堪へ得る男子に、ヤム芋、タロ芋のやうなものを栽培させるとか、果樹の手入れをさせるさかして補充の道を講ずると同時に、ある場所を限つて其處の果實類または魚類をタブとする。或はまたその年内だけバナナでも、パイナップルでも、ヤム芋でも、とにかく不作と思はれるものをタブとする、といふやうにしてそれだけのものを役目のために保

存する。

食物に関するタブは最も普通であるが、それ以外のものでも随分タブとなり得る。要するに王者は何物でも自己の欲するがままにタブを宣することができるのであるから、自分自身に都合の悪いことをタブにして封じてしまふくらのことは朝飯前である。何れの島でも王者王族は大抵タブである。

昭和二年六月五日印刷

昭和二年六月十日發行

世界の奇習異俗

定價金貳圓貳拾五錢

著者 藤井常陽

發行者 東京市本郷區千駄木町二七九  
塚田六彌

印刷者 東京市小石川區久堅町五二  
中林良治

不許  
複製

發行所

東京市本郷區千駄木町二七九  
振替東京三五六七二番  
電話小石川三七二三番

一誠社

著 生 先 彦 重 本 松 士 學 文

# 現 代 國 語 辭 書

## 本 書 の 特 色

### 普及版發行——特價提供

正確で、輕便で、兩も頗る要領を得易い本書の特色は、忽ち天下讀書子の認むる所となり、非常の歡迎を受けつゝあるに感激し、國家奉仕の趣旨に基き、茲に普及版を作り特價を以て提供することに致しました。奮つて御注文あらんことを希望いたします。

- 一、漢字を知らない時、忘れた時、六ヶ敷い假名遣に依らず發音のまゝ引けば正しい漢字が立所に解ります。
- 二、假名遣が解らない時、發音のまゝ引けば正しい假名が解ります。
- 三、漢字の次へ送り假名があるか、いらぬか、どういふ假名を送るかと迷ふ時、發音のまゝ引けば解ります。
- 四、品詞の別が明かにしてありますから、正しい書き方が解ります。
- 五、同音異義の文字が澤山ありますが、その場合にはどの字を遣ふか解ります。
- 六、日用語は能ふ限り多く、外來語、新語も収録し凡て七萬語の多きに達して居ます。

（送料七十錢） 特價金壹圓拾錢 三五版 六號二段 千餘頁

發行所 東京市本區千駄木町二七九番 一誠社

~~556~~  
~~232~~

